

本という存在

法学部教授

水 野 紀 子



退職を控えて、研究室を明け渡す時期が迫りつつある。研究室の壁を埋める、天井まで届く本棚には、ぎっしりと本が並べられており、並んだ本の上のわずかな隙間にも横積みの本が押し込まれている。自分の書いたものが掲載された書物だけでも、雑誌などが多いので2連の本棚を埋めていて、とても自宅には収まらない。昔、先輩の学者から「この稼業は、なんとか本は買えるけれど、買った本を収める空間は買えないよ」といわれたのを思い出す。譲ったり処分したりはするつもりだが、未読の積読本も少なくなく、退職後も原稿債務を抱える身としては、手元に置く必要がある専門書も多い。おそらくやむを得ず、多くをPDF化することになるのだろう。

研究室に残った頃、図書館の棚に並んだ一世紀以上昔の古いフランスの本を、その古びた革表紙の質感に圧倒されながら眺めたのを思い出す。カタカナの漢文読み下し文から現代文まで大きく変化した日本の本と違い、現代フランス語と変わりにくく読めたそれらは、フランス近代の厚みを感じさせた。

つぶやき

書架の間をぶらぶら歩くと、ふと目に留まる一冊があります。今の関心ごと、忘れかけていた興味等々。そして、本の背表紙を読むたった数秒から広がる想像の世界。大げさかもしれませんが、図書館にはいつも新たな世界との出逢いがあります。図書館は、そんな出逢いが生まれる場所。授業の合間に、ぶらりと書架ウォーク、楽しんでみませんか。

現物の本とデジタル情報の違いは、通常の対面ゼミと、コロナ下での画面越しのゼミとの違いに、どこか似ている気がする。画面越しでは、学生たちがわかっているのか退屈しているのか面白がっているのか、さっぱり読み取れず、生身の学生たちと対面することでどれほど情報を得ていたかを痛感した。

それだけなら高齢者の懐古趣味と言えるかもしれないが、デジタル化社会がもたらした出版不況は、深刻な現実問題である。本は、著者と編集者の共同作業の産物である。編集者の目利きが活字の水準を担保しており、その費用は本代が担保していた。人間が読める量は限られている。水準が担保されないデジタル情報が読書の時間を奪うと、文化、さらに政治の水準にかかわるだろう。この難題が解決するまで、図書館は、水準の保障された本を確保する避難場所となり続けるのかもしれない。

2025(令和7年)10月1日 発行

編集 図書館だより編集委員会
発行 白鷗大学総合図書館
〒323-8586 栃木県小山市駅東通り2-2-2
ホームページ <https://library.hakuoh.jp>
印刷 第一印刷株式会社

図書館だより

第65号 2025. 10

HAKUOH

白 鷗 大 学

映画『国宝』を観て

教育学部教授

浅 木 尚 実



幼児教育に携わることになった最初のきっかけは、『子どもの図書館』（石井桃子著、岩波新書）との出会いでした。ページをめくるたびに、「子どもに本を届ける」という仕事の深さとあたたかさに心を打たれ、この世界に惹かれていきました。そして運命のように、石井桃子先生に出会います。彼女のまっすぐなまなざしと、子どもたちへの真摯な思いに触れたとき、私は迷うことなく、絵本とおはなしの世界へと飛び込みました。

私は、子どもの頃からアンデルセン童話等を父から読み聞かせてもらいながら、さまざまな児童文学に親しんで育ちました。物語の中で、登場人物に思いを馳せ、想像の翼を広げながら、生きていく上での礎が築かれていきました。大人になっても、絵本や児童文学から抜けられず、この面白さを何とかたくさんの子どもたちに伝えたいと思うようになり、白鷗大学で教鞭を執ることはまさに私の生きがいでした。

映画『国宝』を観たとき、映し出される人々の姿が、芸術や文化の継承に心血を注ぎ、「覚悟」に満ちていることに感動を覚えました。終映後、胸の奥に沈殿していた想いが、ふっと浮かび上がったのです。石井桃子先生たちが命がけで築いた“絵本の力”を、いま誰が伝えているのだろう…と。

戦後の混乱の中で、こどもたちの心に本を手渡すことの意味を見つめ続けた偉大の先達は、絵本をただの読み物ではなく、心の土壌を耕し、言葉の根を育て、想像力の翼を広げ、「自分で考えること」の入り口としての読書の世界のすばらしさを伝えてくれたのです。そんな信念のもとに数々の名作を届け、公共図書館や読書運動の礎を築いてきてくれたのです。

私は先達の足元にも及びませんが、今こうして絵本と共に生き、子どもたちと向き合い、学生や保育者に語りかける毎日を送る中で、「絵本の力を担う者の一人として、自分も名乗り出なければ、バトンが宙に浮いたままになってしまう」と背中を押された想いでした。これはおこがましい自惚れではなく、後輩の責任であり、これからの私の使命なのだと思っています。映画が映し出していた『国宝』は、物ではなく、人の中に宿る精神でした。絵本の世界にも、同じ精神が息づいています。受け継ぐ覚悟を、今ここに刻みたいと思います。



青春の輝きと一冊の本

経営学部教授

船 田 眞里子



情報工学科2年生になったばかりの私は、一冊の本と出会いました。1年の教養課程が終了し、専門分野の入り口に立ったばかりの時期でした。科目名は忘れましたが、後に卒業研究と修士論文のご指導をいただいた恩師の授業で代数学の入門書S. Lang著“Algebraic Structures”(Addison-Wesley, 1968年刊)に出会ったのです。授業は、この書籍に従って丁寧に進められ、高校までの授業では全く触れたことがなかった群(group)、写像(mapping)、同値(equivalence)、同値類(equivalence class)などの言葉に出会いました。それまでに、自身が学んできた数学、算数などで用いられていた演算、集合などの概念、約束、論理などが抽象的、一般的に定義されており、あまりにも明快に記述されていることに深い感銘を受けました。

その後ダイヤモンド社から芹沢正三、大谷正美両氏による訳本「ラング代数系の構造」が出版されましたが、定期試験や大学院の入試のためだけでなく時間があれば、この書籍を一言一句も読み飛ばさずに熟読し、ほとんど全ての演習問題を解きました。この時間は、近代代数の世界に没入

し、学ぶことが楽しくて仕方がなかった、輝いていた私の青春の1ページであったと思います。この本を開くと、一生懸命に定規でマーカーを引き、赤鉛筆で書き込み、鉛筆で質問事項を書き並べている、19歳の私が顔を出します。

いま思い起こせば、「ラング代数系の構造」は、近代代数学の入り口に過ぎない書籍ですが、暗号理論や人工知能といった現代社会を支える技術の基礎理論でもあり、私にとっては、理論の美しさを伝え、深く考える楽しさを教え、その後の研究生生活の基礎を培ってくれた書籍です。今まで、様々な方々に出会い、多くの教えをいただき、幸せな人生を歩ませていただきました。本との出会いもまた、私の人生に深い感動を与え、人生の基盤を与え、豊かにしてくれています。数学の理論の中にも人生を生き抜く知恵があり、社会現象、経済現象、自然現象を理解する英知があり、それらの問題に対処する方法を見つける手がかりがありました。それらを若い皆様にいくらかでもお伝えできれば、私の思い出にも少しは意味があったかなと思います。

図書館ニュース

◆図書館利用ガイダンスを開催しました

2025年度新たな試みとして、新入生の皆さんを対象に本キャンパス303教室において、図書館利用ガイダンスを開催しました。図書館の活用方法やレポートの作成方法について説明を行い、約60名の学生の皆さんに参加いただきました。



図書に関する思い

法学部教授

益 井 公 司



小さい頃、本は大嫌い(ただし、貝殻・石・植物や魚の図鑑等は大好き)、高校時代も図書室にある分厚い本を見て、こんなのを読み通す奴がいるのだろうかと思った。大学に入って、ゼミナールで我妻栄の「民法講義」全9冊を読み、理解しておくようにと言われたときは無理だと思った。しかし、学説や判例を検討していくうちに覚えることはあまりなく、そこで言われている学説や判例は自然科学でいうような真理ではなく、どのようにすれば条文に沿いながら当事者間の利害をうまく調整することができるかという説明にすぎないと考えようになると、わりと面白く本が読めるようになった(推理小説を解くようなものであろうか)。またこのころ偶然読んだ渡辺一夫や宮崎市定の一連の著作を読み始めると止まらなくなった。

大学院では、ドイツ法・フランス法を模範にして作られた日本民法の規定には、ローマ法以来の歴史があり、これを理解するには、少なくとも、ドイツ法ではドイツ民法の第一草案・第二草案を、フランスではドマ、ポチエの著作を読まなければいけない、それから現代にいたる学説史を整理するようにいわれていた。しかし、当時の私の語学力ではできなかった。ドイツ文献を読むには関口存男の本が役立ったが、翻訳ノートが増えるだけで論文は書けなかった。自分の無能さに愕然としたし、どうまとめればいいのかも分からなかった。

博士課程入学後は、紛争を解決するための個々

の条文を理解するために、民法正義、法典調査会議事速記録、民法起草者である梅・富井・穂積の著作を読み、さらに、岡松参太郎、中島玉吉、川名兼四郎、石坂音四郎、末弘厳太郎、沼義雄、鳩山秀夫、勝本正晃の著作を読み、これらの本を古本屋で買い集めるだけでなく、その他現代の法学者の著作も買い集めるようになった。また明治以前のこともということで、民事慣例類集、商事慣例類集、徳川禁令考、両替年代記等を読んでみると現在問題となっている事柄がすでに江戸期においても考えられている。まさに「日の下に新しきことなし」であろうか。

専任の教員になってからも同じような生活を続け、すべての部屋が日・独・仏の本で埋まってしまい、生活の場を失わせ妻に迷惑をかけている。図書館をもっと利用すれば済んだのかもしれない。インターネットやAIの時代になったとしても、自分で考え問題を解いていく楽しみを味わうには本に勝るものはないであろう。



ドイツ民法第一草案理由書